

ふことまた茶道を古田織部に習うたこと等の事蹟は、其全部を信じ難いまでも執りて以て、彼が畫風の特徴を理解する一助となすに足るものであらう。

(菅沼)

八、改琦筆 枇杷圖

神奈川縣 竹添履信氏藏

挂幅 絹本淡彩 竪一三三厘 横三八・七厘

枇杷一枝、玉果累累として垂るゝ所、一介の鳥蟲だに點ぜず、而も結構宜しきを得て些かも弛緩の氣を見ない。色彩の主調は地に薄き金泥を敷き、濃淡の墨色の微妙なる變化を基調として果實にあるかなきかの黄色を用ふるのみである。改琦字は伯韞、又一字を白香と云ふ。七薊と號し又玉壺山人と號した。江蘇省松江縣に僑居し、蒲柳の質にして藥餌に親む事が多かつたが詩畫共に天授の才あり、殊に花卉、士女に工に、乾隆嘉慶の交、名聲一時に高く、都中の人士その片楮を得ては之を瑰寶よりも貴しとし、千金を以てするも尙易ふ事を肯じなかつたとは、墨林今話、墨香居畫識等の傳ふる所である。道光九年卒す、時に年五十六。宜なる夫此一小幀にも一脈寂莫の氣を藏し、ほそくとしてしかも鋭い神經の動きさへ觀取し得らるゝかと思はるゝものは、是一箇多病の才

内外彙報

財團法人尾張徳川黎明會の設立

侯爵徳川義親氏の寄附になる財團法人尾張徳川黎明會は昭和六年十二月十三日を以て設立された。

子が病閑の餘暇、憂を寫
かんが爲に、平生玩賞の
金吉金眞本をとり、或は
筆を嘗めて迎夏果垂金と

(原 寸)

詠じ或は縑を展べて一枝

を描き、以て自ら慰めたものであらうか。かくの如き畫趣は固より清朝畫家に通有なる一特質であるが、特に相近きものを求むれば南田樗壽平の作品と靈犀相通するものあるを認め得るであらう。因に言ふ金吉金、名は農、字は壽門、冬心と號し康熙、乾隆の間にあつて名一世を蔽ふた鬱乎たる大家である。

改琦の名は夙に我國に知られ、その畫蹟の紹介せられたるものも一二あるが、殆んどそは美人畫であつて婦人畫家としての改琦の名は稍もすれば、花卉蘭竹の妙手としての改琦の名を蔽ふの傾があつた。然しながらその描く所の婦女は容姿一律にして甚だ變化に乏しく、勿論仇實父の流を亞いでたゞ様によつて葫蘆を描くに止まつた時流の凡庸畫家に比すれば、妍雅妙絶と稱するも決して過褒ではないが、かの世上に喧傳する所の紅樓夢圖の如きよりも却つて、その眞價はかくの如き一木一章を寫して能く自然の眞に迫るものにあるべく、清朝名家畫錄に所謂「所繪蘭竹筆情超逸不染點塵」とあるもの直ちに借りて以て此畫の評とする事が出来やう。(正木)

舊尾張藩主徳川家は、藩祖義直侯以後多年に亘つて傳來された、美術的にも歴史的にも貴重なる什寶美術品又は稀觀の古書籍の多數を所藏されてゐるが、當主義親侯爵は、それ等が個人的に死藏さるべきにあらずとして、豫てより之を活用するの方途を考慮せられつゝあつたが、計畫熟して、什寶器具圖書及び土地建物に有價證券並に現金を添へ、合計金壹千五百四十萬圓餘の財を公共に

寄附せられて、こゝに本會の設立を見たのである。その目的とする所は、美術及史學並に生物學の研究に資する爲、徳川家祖先傳來の什寶古書の保存其他美術品及圖書の蒐集保管公開をなし、且つ之に關する指導獎勵をなすにあるが、この爲に行ふ事業として左の三種が挙げられる。

一、美術館及倉庫ヲ建設シ尾張徳川家祖先傳來ノ什寶及美術品ノ保存其他一般美術品ノ蒐集保存陳列ヲ爲スコト

二、文庫ヲ建設シ尾張徳川家祖先傳來ノ古書ノ保存並ニ史學ニ關スル參考書及其他ノ圖書ノ蒐集及古書ノ複製出版並ニ史學ニ關スル研究報告ノ發刊ヲ爲スコト

三、生物學研究所ヲ建設シ生物學ニ關スル研究調査報告ノ發表刊行及生物學ニ關スル研究員ノ養成指導ヲ爲スコト

舊家富豪諸家に所藏される貴重なる美術品が、廣く利用される途を缺いてゐることは、屢々指摘される所であつたが、さきに大倉集古館、大原美術館、近來に到りて藤井善助氏の有隣館、嘉納治兵衛氏の白鶴美術館が設けらるゝに及んで、問題は解決に一步を踏み出した感があつた。而して今また尾張徳川家が寶藏を開いて有効適切なる方法を以てこれを一般的利用に供さるゝに至つたことは實に學界の喜びには止らない。就中、美術及史學に關する事業は、特に吾人美術研究者にとつて欣快に堪えぬ所である。右事業の一部たる美術館の建設に就ては、既にその懸賞設計圖案の當選が發表され、經營、陳列等に就ても着々準備を進められてゐる由である。遠からずして更に詳しく紹介する機會あることを期待してゐるが、茲に取りあへず近來學界の快報として財團法人徳川黎明會の設立を報じておく。(木下)

深大寺釋迦如來の厨子落慶

東京府北多摩郡神代村深大寺に藏する釋迦如來倚像は、關東に於ける類ひ稀なる傑作として人口に膾炙してゐるものであるが、從來わさ／＼この僻村に杖を曳いてその慈容に接した者は必ずこの靈像が甚だ相應はしからぬ厨子の中に

安置せられ、剩へその構造宜きを得なかつたが爲に、纔かに懷中電燈を便りとして厨子の奥深くを眺き込まなければならぬ不便を叩つた事であらう。

今般栗山善四郎、神通松次郎二氏願主となり有縁の士を勸化して簡素なる一

深大寺藏

釋迦如來倚像

(落慶式記念寫眞より)

新造厨子